

ハウス・オブ・ヤマナカ 朽木ゆり子著 歴史から消えた世界的美術商

〈評〉秋田県立近代美術館館長 河野元昭

小 中 大 保存 印刷

一気呵成（かせい）に読んだ。気がついたら終章まで来てしまっていた。個人的に親しい人や作品の名が、次々に現れるのも止まらなかった理由だが、それは二義的なことに過ぎない。『フェルメール全点踏破の旅』で洛陽の紙価を高めた著者が、今度は日本美術の分野で、それに勝るとも劣らない興奮を与えることに成功したのである。

山中定次郎といっても、あるいは山中商会といっても、ほとんどの人は知らないだろう。美術史研究者でも、事情は似たり寄ったりだ。分厚い美術辞典でも、まず出てこないからである。しかし山中を知らずして、欧米の日本美術コレクションを語ることはできない。

慶応2年（1866）大阪に生まれた定次郎は、父に従って古美術商の道に入り、奉公に出た山中家で見込まれ婿となる。そして28歳のとき、新天地を求めてアメリカに渡り、日本美術の輸入販売を始める。そのとき立ち上げたのが山中商会で、まだ続いていた日本熱

（ジャパン・クレーズ）に乗り、世界的な美術商にのし上がる。もっとも著者は、すべてを定次郎の功に帰すことに対して慎重であるけれども。しかし日本とアメリカは戦火を交えることになり、敵国資産管理人局により山中商会は清算され、美術史からも経済史からも消えていってしまう。

「世界の山中」がなぜ消えたのか。その謎を探ることが本書のライトモチーフとなっている。まず山中商会のお得意さんだった美術館やコレクターのアーカイブに保管される一次資料を、丹念に読み解いていく。ニューヨークの仮店舗から始まって、アメリカ各地へ、やがてロンドンにも支店を開き、ヨーロッパ全域に顧客を広げていく成功物語は、読むものを爽快な気分にしてくれる。

次に著者は、アメリカ国立公文書館カレッジパーク新館にある87箱もの押収資料と、敵国資産管理人局の年次報告書をつき合わせながら調べていく。日米開戦から1944年にかけて、アメリカ政府がどのように山中商会を解体していったか、すべてが白日の下にさらされる。この第3部がもっともスリリングだ。真実を解き明かそうとする、執念にも似た著者のエネルギーに、深い感動を覚えるのは私一人ではあるまい。

（新潮社・2000円）



新潮社

画像の拡大